「備える！中日サバイバルキャンプ」（中日新聞社主催）の出前授業が九日、名古屋市丸の内中学校で開かれた。一泊二日のキャンプは六年前から続くが、出前授業は初めて。一年生二十三人が担架作りや応急手当てに取り組んだ。

講師を務めたNPO法人レスキューストックヤードの林大地さん（三九）が、市に備わる救急車は六十一台だと説明。「南海トラフ地震のような大災害では助け合いが必要」と呼び掛けた。

毛布や物干しざおを使った担架作りでは、生徒たちは四班に分かれて制作。できた応急担架で、体重約七〇キロの水谷圭一教頭らをの

ブルーシートと物干しざおで作った応急担架に水谷教頭をのせて運ぶ生徒たち＝名古屋市中区の丸の内中で

災害で必要になった時は取り入れたい」と話した。

キャンプは段ボールシェルターや土のう作り、天気講座などを学ぶが、出前授業は県内の小中学生を対象に、学年、人数、時間に応

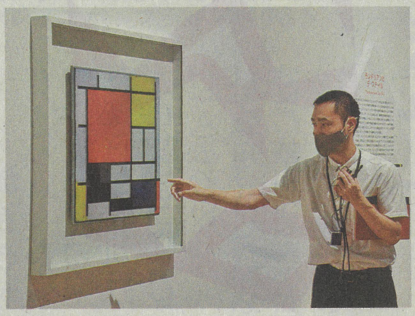
モンドリアンの作風 進む抽象化くっきり

豊田市美術館で展示

豊田市美術館で十日、抽象画の先駆者として知られるオランダの画家ピート・モンドリアン（一八七二～一九四四年）の絵画を、初期の風景画から作風の変遷をたどって展示する「モンドリアン展　純粋な絵画をもとめて」（同館など主催、中日新聞社共催）が始まる。九月二十日まで。

モンドリアンはオランダ中部に生まれ、初期は牧草地や農家の風景などを描いていた。徐々に縦横の線を意識した構図の取り方が見られるようになり、一九一一年にフランス・パリに渡ってからは、街中の景色から建物の縦横の線だけを抜き出したような作品など、抽象化が加速。独自の絵画理論を突き詰め、晩年まで研究と作品制作を続けた。

本展では、オランダのデン・ハーグ美術館所蔵の五



コンポジションシリーズなどが並ぶ会場＝豊田市美術館で

難病「全身性エリテマトーデス」

魚などのEPA 症状改善効果

名大 菅波教授・伊藤助教ら研究

魚の油に多く含まれ、中性脂肪を下げる効果などで知られるエイコサペンタエン酸（EPA）に、難病「全身性エリテマトーデス」の病状を改善する効果があることを、名古屋大環境医学研究所の菅波孝祥教授、伊藤綾香助教（いずれも免疫代謝学）らの研究チームが突き止めた。

この難病は発熱やだるさなどのほか、関節炎や腎不全など患者ごとにさまざまな臓器の症状が出る。国内の患者数は推定六万～十万人で、特に二十～四十代の女性に多いとされる。根本的な治療法は見つかっていない。

チームは、この難病で亡くなる患者に動脈硬化の症状が多いことから、症状を改善するEPAに注目。この難病を患うマウスに六～十六週間、EPAをエサに混ぜて経口摂取させた。結果、EPAを摂取したマウスは、していないマウスと比べ、病気の原因となる物質と、物質を作る細胞の量が50％少なくなっていた。

伊藤助教は「EPAの摂取は、早ければ数年後に全身性エリテマトーデスの新たな予防法、治療法として実用化できる可能性がある」と説明した。研究成果は欧州の国際科学誌「フロンティアズ・イン・イムノロジー」（電子版）に掲載された。

（白名正和）